

お魚女史

坂口安吾

青空文庫

その朝は玄関脇の応接間に×社の津田弁吉という頭の調子の一風変った青年記者が泊りこんでいた。私は徹夜で×社の原稿を書きあげたところで、これから酒をのんで一眠りと、食事の用意ができたなら弁吉を起そうと考えていた。その弁吉がキチンと身仕度をと、のえて、ノツソリとあがってきた。

「ねえ、先生、妙な女が現れたよ。キチガイかも知れないねえ」

文士の生活になじんでいる雑誌記者というものは、若年で、頭のネジが狂っていても、訪問客にへまな応待はしないものだ。私が安心してしていると、弁吉はニヤリ／＼と、

「ねえ、先生、会っておやりよ。海のねえ、ホラ、お魚ねえ、お魚みたいな喋り方をするんだよ」

「パクパクやるのかい」

「そうじゃないんだよ。会って見ないと判らないんだ。とにかく、美人だね。ハハハ。すぐく、色ツばいんだ。ちよツとね、目にしみちやつてね、ハハハ、ボクは美人にもろいんだよ。デねえ、社の原稿書いてもらつてるところだろう。本来なら撃退しなきゃアならないんだけどねえ、そこんどこを何とかしてあげるツてネ、恩をきせてネ、ハハハ、約束し

ちやつたんだよ。だからさ、会ってやつておくれよ、ねえ。アレ、ちようど、いゝや。原稿、できてらア。ハハハ、うまく、いつてやがら」

そこへ食事の仕度を運んできた女房と女中が、弁吉を見ると、テーブルへガチャンとお盆をおいて、腹を押えて笑いころげた。

「ハハハ、あれを立ちぎゝしたネ」

と笑いのとまらない二人の女を見下して弁吉はニヤリニヤリ、

「ハハハ、ボクがね、あなた小説かいてるのツて、きいたんだ。するとねエ、アンタ、書生？ 玄関番？ て訊きやがんのさ。ボク、編輯長ですよツて言ったんだ。オドロカねえのさ。だもんでネ、ボクねエ、本当は、新人のねエ、一流のねエ、詩人でねエ、ペンネーム教えてあげようかつてねエ、アハハ、ほんとに訊かれちやつたら誰を名乗つてやろうかと思つてさ、ちよつと困つていたけどさ、アハハ、テンデ訊かねエや」

二人の女は益々笑いがとまらなくなつたが、弁吉は悠然たるものである。

「あんまり待たしちや気の毒だから、じゃア、つれてくるかネ。応接間はネドコがしきつぱなしだからネ。だけどネ、ちよつと、モツタイをつけてネ、待たしてやるのも面白いんだ。だつてさ、あなた何してんのツて訊いたらさア、アンタなんかゞヨケイな事を訊くん

じやないよツてねエ、ハツハツハ、香港から引揚げてきたんだってさ、香港でスパイをやつてたツてねエ、日本軍のじやなくつてさ、聯合軍の手先きでねエ、日本の将校を手玉にとつてたなんて言いやがんだもの。日本人はダラシがねえんだツてさ。ツマラネエんだそ
うだネ。だもんでネ、先生がネエ、いくらか変つてるんじゃないかと思つてネ、見物に来
たんだそうだよ。手ブラで来やがんのさ。包みをかゝえているからネ、それ手ミヤゲつて
訊いたらネ、オヒルのお弁当だつてさ。動物園にもあきたんだろうネ。アハハ。キチガイ
かも知れないネ」

と、私の返事など気にかけるところはミジンもなく、悠々とつて返して、女をつれて
きた。

「コンチハア」

と部屋の入口で女は奇声をあげたが、キッチンと坐つて三ツ指をついて、きわめて礼儀正
しくオジギをした。

「アハハ。入場料のいらぬ動物園てのが、あつたんだねエ。アハハ」

と、弁吉は悦に入つて、

「今ね、日本産の河馬がねエえ、お酒をのむからね、徹夜の催眠薬なんだ。あなた、のむ

の？ ついであげようか」

「この子、キチガイなんですかア。先生」

と云つて、女は私にニツコリ笑いかけた。私はバカらしくなつて笑いだしたが、弁吉は大喜びで、

「ボクねえ、松沢病院へタネとりに行ったことがあるんだよ。そしたらさ、患者がねええ、あつちの窓、こつちの窓からボクを指してさ、キチガイ、キチガイって笑いやがんのさ。あなた、なんて云うの？ ア名刺があつたネ、佐野龍代クンネ、龍代さんは香港で入院していたの？」

「イヤらしい子ネ。先生たら、文士なんか、なんですかア、先生のお弟子なんて、みんなこんなキチガイなんですのウ」

「ハツハツハ。ボクはキミ、健全な人間なんだ。日本人的でないだけなんだよ。香港なんかも、人間はいないよねエ。田舎だからネ」

「香港、香港、て、さつきからネゴトばかり言ってるわね」

「香港じゃア、なかったの」

「バカなんですよ、アンタは。アンタみたいなチンピラが、編輯長だの、詩人だのツて、

それで私が香港のスパイのツて、からかつてるのが判らないの」

「これは、イケネエ。ハハハ、その手があつたかネ。まんざら、キチガイでもなかつたんだネ。じゃアネ、ウン、そうなんだ、キミはむしろ利巧なんだネ、キチガイに類することだ、その証拠なんだヨ。美人だからア。美人はすでにキチガイじゃないんだ。美はねエ、それ自身、正常それ自体ですよ、ねエ、そうなんだよ。ハハハ」

と、弁吉は悠々として、たじろがない。佐野龍代女史は動物園の玄関番の怪獣ぶりにムツとした様子であるが、チンピラがこの有様では、目ざす猛獣の習性が予測しがたくなつたらしく、柄になく沈黙している。

女史は二十六だそうだ。弁吉がカブトをぬいだのは尤もで、こんなとつた美貌が地上にいくつと有るものじゃない。色の白さ、リンカクの正しさとあざやかなこと、彫刻と申すほかに仕方がない。着物もたしなみのある着附で、品がよく、うつむきがちに沈黙している、いかにも、ゆかしく、つゝしみ深く見えるのである。そのくせ、いったん、口をひらくと、ガラリと一変して、頓狂で、騒々しい。

弁吉は、海のねエお魚みたいに喋るんだよ、と云つたが、ナルホドねエ、魚が喋つたら、やつぱりガラリと一変して、頓狂で、騒々しくなるのかも知れない。

お魚女史は猛獣の正体が判らないから、はじめは澄していたが、まもなくお酒が廻って、私が馬脚を現したから、安心して、喋りはじめた。

「私はねエ、ご近所へ引越してきたんですのよ。防空壕なんですのよ。それでもチャンと屋根があつて、上下左右コンクリートで厚くぬりかためてあるでしょう。陸軍中佐のウチでしょう、セメントぐらい自由だったんでしよう、四畳半以上もあるでしょう、いゝものよう。遊びにいらしてネエ。私、オメカケなんですよ。今は、その方がいゝわねえ。旦那は六十三なのよ。年寄の方がいゝことよ。人間みたいじゃないでしょう。ドラムカンのだのアキビンだの、そんなものと大して違いはないものなのよ。人間なんか、いやらしいわね、ねえ、先生。先生も、エロですかア。アラ、いやだア、キャーッ」

その防空壕なら、私もよく知っていた。この界限随一の名題の壕で、戦争中は岡焼き連の悪評高く、バクダンに追いまくられていた私なども、フテエことをしやがると横目に睨んでいたのであった。

疲れきっていた私は、酔っ払って、先に寢床へもぐって眠ってしまったが、弁吉はお魚女史を送って、防空壕まで参観に赴いたそうだ。

すると、井戸が遠くつて、拭掃除ができなかつたのよ、と云つて、弁吉にバケツの水

を運ばせて、コンクリートの上下四方でいねいに拭かせ、水を一滴こぼしても、コラ、なんてことするのよ、地上建築と違うよ。衛生が判らないの、マヌケモノ！ と叱りつけ、それでも湯を沸して、お茶をついでくれて、

「ハイ、御苦労さま。あんたは一つでタクサンだ」

と、まずそんな大福をひとつ皿にのせてくれて、自分はヨーカンのカノコだのと大きな菓子皿からとりだして食べている。

「ボクにもヨーカンおくれよ」

「ダメ」

と、冷めたく一言、自分がたべるだけ食べてしまうと、菓子器をかたづけ、

「ねえ、アンタ。アンタの社で、私をいくらで使ってくれる。タイクツなのよ。それにオコツカイも、足りないのよウ」

「そうだなア。三千円ぐらいじゃないかネ」

「一カ月の給料よ」

「だからさ。それだつて、高すぎるんだよ。だいたい、女の子が、三人で、男の一人の仕事もできないからねエ」

「ヘーン。アンタはいくら貰うの」

「六千円ぐらいだね」

「ナニ言ってるんだい。アンポンタン。私はねエ、目があったら、私を見てごらん。エロ作家ぐらい、一目で悩殺しちゃうからネ。私のナガシメはネ、十幾通りも変化があるけれど、文士なんか二ツ目までゞタクサンだ。オマエサンはデクノボーさ。ゼンゼン、センスがありやしない」

と、大変な見幕で怒りだしたそうであつた。以上がお魚女史の第一回目の訪問のアラマシである。



第一回の登場ぶりが凄かつたから、連日の来訪に悩まされることになるのかと怖れをなしたり、内々は待ちかねるところがあつたりしていたが、一向に現れない。

三四度、道で会つた。すると、アラア、先生、コンチハ、オハヨウ。アラ、イケネエ、シマツタ、など、慌しく取りみだしながら、喋りまくるのは、第一に弁吉の悪口である。

弁吉は毎週三日ぐらいつお魚女史を訪問しているのである。そのツイデに、稀に私を訪ねて女房とムダ話をして行くのだが、そんなことはオクビにも出さない。

「弁吉はアツカマシイのよ。ヨーカンおくれよう。カステラくしろよう。旦那が来てる時でも、平気なんですよ。オタノシミだねえ、ハハハア、なんて、ニヤニヤ三時間も腰を上げないですよ。あんな子、イヤだわねエ。オ弁当もつて来て、ウチでオヒルたべて行くのよう。先生のウチへ原稿をサイソクに来ていることになってんだけど、行つたつてムダだからネエ、こゝに遊んでる方がノンキでいゝやア、社へ行つてねエ、先生ンとここで三時間ネバつて来たんだつて威張るんだア、みんな同情してくれらア、アハハア、すまないなア、なーんてネエ。でも、先生、そんなのウソよう。ねえ、先生。私の顔が見たいのよう。わかつてらア。ネーエ、セーンセ」

そんな話のうちは、まだ良かったが、ある日、いったん別れたあとで、追っかけてきて、「先生、どちらへ、ゴ散歩ウ？ 私も一しよに行きますわよう。おイヤ？ あらア、そんなことないでしょう。アラマ、エへへ、言ツチャツタワヨ、アハハ、バカネ、チエツ！」マツカになつてオデコをたたいたり、舌をだしたり、そんな忙しい合間に、私に、一段目、二段目、三段目ぐらゐまでナガシメをくれる。

「私ね、先生、ちかごろ、小説かいてんのよう。それが出来たら、遊びに行くわア。読んで下さるウ。私、ヘタよウ。でもネエ、ちょツとしたもんだわア。エヘヘ。おかしくないですかア。おかしいですかア。アラ、イヤだア、キヤーツ」

小説書きというものは、はからざるところで、この脅迫におびやかされるものであるが、この時ばかりは、私も心胆がつめたくなつてしまった。

「それ、私小説？」

と、私がきくと、とたんにマツカになつて、身をくねらせて、

「あらア、先生、イヤだわア。あら、ワタシ、ハズカシイ。先生たら、私小説だなんて、あら、そんな、まア、ハズカシイ。あらア、セーンセ。イヤよウ。ヒドイことよウ」

大変な騒ぎで、こゝで又、四段目から、五段、六段目ぐらゐまでナガシメをいたゞく。忙しい合間に、なるほど、ナガシメだけは、よく、うごく。

「なぜ、はずかしいの」

「だつて、先生、あらア、先生、エロだわア。まア、先生、キヤーツ。私小説だなんて、自分のこと、書かせるのウ、私にイ。あらア、キヤーツ。あんなこと、書くなつて、まア、セーンセ、私にも書けつて言うのウ、アンナコトウ、まア、エロだア、キヤーツ」

マツカになつて、身悶えて、声が秘密をさゝやくように低くなるかと思うと、にわかにはキヤーツと脳天から立ち昇り、行き交う人々が呆氣にとられ、私をユーカイ犯人のように険しい目で睨むから、私も困つてしまつて、

「ねエ、君、わかつた。小説、できたら、持つてきて下さい。じゃア、さよなら」

「あらア、先生、ひどいわア。一しよに、お茶ぐらい、のみましようよ。私と一しよじゃ、はずかしいのウ。あらア、誰も恋人だなんて、思わないわア。思わないでしょう。思いますかア。思うかしらア。思うかなア。イイヤア。そんなことウ。チエツ。ナニシア。あらア。でも、先生、お若く見えるから、いくらか釣合うかなア。でも、先生、禿げてらつしやるでしょう。変よウ。私、ハズカシいわア。キヤーツ」

いきなり、私の腕に、とびついて、ぶらさがつた。御本人も、ビックリして、ちよつと手をひつこめかけたが、思い直したらしく、私の袖をちぎれるぐらい掴んで、一しよに手をふつて歩きはじめた。

「こんなこと、なんでもないので。先生、ハズカシイのウ。間違つちや、ダメよウ。男の人ツて、ウヌボレルわネエ。すぐ、そんな風に思うらしいわ。思うわネエ。でも、イイさア、こんなことウ。ネエ、先生、私イ、探偵小説、かいてんので」

私は羞しさに混乱して、お魚女史の言葉などは、もう、きこえなかつた。私はマーケットへ散歩に行つて本を買つてくるつもりであつたが、とても人混みの方へは行けない。喫茶店へはいれば、何事を、どこまで喋りまくつて、何事が起るか見当もつかない。人の居ない焼跡の方へ歩けば、益々小平三世ぐらいに見立てられるに極つてゐる。万策つきて、

「アツ、そうだ、忘れ物をした」

と叫ぶと、お魚女史の手を払つて、私は血相変えて、駈けだしてゐた。戦争中のバクダンのお見舞以来、こんなにイノチガケで走つたことはない。

その次に、路上で会つたとき、

「あらア。先生、先生たら、案外ウブだわねえ。あんなに、ハズカシがつて、逃げだすなんて、そんなに、ハズカシイのウ。あらア。先生たら、マツカになつたわよウ。あらマア、キヤーツ」

御自分の方がマツカになつて、身悶えて、又、私にナガシメをくれた。



お魚女史が二度目に私を訪ねてきたのは、春の嵐の夜であつた。そのとき私の家には三人の来客があつて、お酒をのんでいた。こんな嵐に人を訪ねてくるのは、多忙な記者でなければ、よつほどヒマな怪人にきまつている。

一人は弁吉である。彼はお酒をのまない。元々ネジが狂っているから、お酒の必要がないのだろう。

あとの二人が一まわり大きな怪人で、だから、カラダも大きい。が甲羅をへて見た目は立派な紳士である。一人は凹井狭介という評論家で、一人は般若有効という小説家である。マルイのが凹井で、ヒョロ高いのが般若であつた。曲者らしい大男が濛々と酒気をたて、大アグラをかいており、その横に弁吉がチョココンと坐つて、ニヤリニヤリしている。

お魚女史は、

「あらア、コンバンハア」

と云つて、目をまるくしたが、二人の曲者が凹井狭介に般若有効という文士で、私の友人だと云つて紹介すると、にわか懐しがつて、

「あらア、愛読してますわア。あらア、あの新聞の小説ねエ。あれ、いゝですわア。お上手ネエ」

凹井も般若も、新聞なんかを書いてやしない。デタラメなのだ。お魚女史は純文学などは口々に知らないから、凹井や般若の名前など知ってる筈がないのである。けれども、平然たるもので、

「先生方にお目にかゝれるなんて、私、光栄の至りですわア。でも、あらア、サスガだなア。サスガですわア。御立派ですわア。こちら、ふとつてらッしやるわねエ。こちら、お高くツて、まア、ホントにねエ。あの、失礼ですけど、こちら、何キロ、二十二三貫でしょう。アラ、そうですのウ、こちら、何メートル、ハア、あら、そう、まア」

お魚女史は文学の話にこだわるとシツポがでるから、すばやく目方だの身長などへゴマカシたのだが、凹井と般若はそうとは知らず、美人におだてられて、凹井は相好そうごうをくずし、般若は沈々と憂いを深めて、思い思いに気を良くしている。弁吉だけは、ツキアイの深いせいで、女史の気質をのみこんでいるから、真相を見破ってニヤリニヤリたのしんでいる。

「龍代さんは知らねえのかな。凹井先生はねーエ。「キチガイ野球」ツて雑誌があるだろう。あそこの編輯長なんだア」

お魚女史はドキンとした様子である。何やら目から閃光を発して弁吉を睨みつけたよう

だが、弁吉は知らぬ顔、悠々たるものである。

「凹井先生は知ってるだろう。ホラネ。ダアク・キャットのパITCHャーの二股長半ねーエ。あの子がねーエ」

「おだまり、チンピラー！」

叫んだところで、ムダである。

「アハハ。あの子がねーエ。この人のラヴさんなんだってさア。アハハア。するとネ。この人がネ。六十三のオジイサンのオメカケになっちゃったんだア。だもんでねーエ。二股長半が怒ってネ。酔っ払ってネ。この人をブツちやっただもんでネ。この人がネ。かねて見覚えた要領でさ。スリコギを握ってネ。こう構えて、エイツとネ。そいつがコントロールが良すぎたんだなア。二股長半のヒジに命中しちゃったんだよ。だもんでさア。去年の暮から二股長半がプレートをふまねえやア。アハハア」

「エ？ ナニ、ナニ？ ワツハツハツア。ウーム、これは」

こういうゴシップときては目のない凹井狭介である。この男には友人の文士どもが泣かされているのである。自分でゴシップをつくりだすという主犯の役目はやらないのだが、ひとたびゴシップがこの男の耳にふれたが最後、二日のあとには津々浦々に伝わっている。

毎日三十枚のハガキを速達でだしている。それがみんな愚にもつかないゴシップを書いたハガキで、当人はただもう、それを人に知らせるのが楽しくてたまらないのである。十六のせがれのせがれのせがれのせがれのせがれの娘がある男の仕業とは、とうてい信じられないフルマイであるが、ゴシップとくると、タシナミも恋も忘れて一膝のりださずにはいられないという奇怪な男で、このときも、忽ちとりのぼせて、喜悅のあまり肩をワナワナふるわせながら、膝をのりだしてきたのである。

すると、テーブルがグイグイツと動いて、彼の胃袋のあたりへドシンと突き当たった。

「アラ、ゴメンあそばせ」

と、お魚女史は事務的に呟いたゞけであつた。彼女は弁吉の話の途中から、多忙をきわめていたのである。どういう目的だか判らないが、テーブルの上のものを、セッセと下へ降していた。口惜しまぎれに、酒をのませないコンタンかな、と私も呆氣にとられていたが、凹井がゲタゲタ喜悅の笑いを吹きあげて一膝のりいれると、折から酒肴の取り払われたテーブルをチョイとひいて、ドシンと凹井の胃袋にぶつけたのである。

「お痛くありませんでしたことウ」

など、鼻唄みたいに呟きながら、尚もセッセとワキメもふらず、今度はテーブルをふい

ていた。

「ワツハツハ。そうですか。ケツケツケツ。二股のヒジはアナタにぶんなぐられたんですか。キャツ、キャツ、キャツ。ギューツ」

再びテーブルが先刻以上の快速力で凹井の胃袋に突き当たっていた。凹井は胃袋を押えて、もう一度、

「ギューツ、グツ」

と呻いて、どうやら他人の気持というものが意識にのぼったらしく、てれかくしに笑いながら、いかにもミレンがましく沈黙した。

お魚女史は嵐の中を何やら大きなフロシキ包みをブラ下げてきたのである。凹井の沈黙を見とゞけると、

「アラ、ごめんなさいネエ」

とニヤリと笑って、フロシキ包みの中から、ピースの箱を三つとりだしてきて、テーブルの上へならべた。

「先生方、これ、御存知イ。今度ははじめた内職なのよウ。弁吉はお金がないから、ダメよウ。でも、よかつたわア。坂口先生お一人じゃアなんだか、悪いようだものウ。凹井先生

と般若先生が居合して下さるなんて、素敵ねえ。先生方は、お金持ちでしょう。裏口営業の常連なのよう。御存知だわねエ、こんなことオ」

三ツ並べたピースの箱を裏がえしにして見せた。まんなかの一ツの箱の中央がむしりとられている。ちかごろマーケツトなどで流行しているトバクである。

「アラ、奥様ア、すみませんですウ。先生の紙入れ、持ってきて下さいませんかことウ。ほんとに、すみませんわ。私、貧乏なんですもの、つらいですわア。あらア、ほんとに、まことに、恐れ入りましたわ。奥様もハツて下さいね。だって、奥様ア、私、ほんとに、つらいんですわ。ねえ、先生方、一回、お一人、五百円の賭け金よ。いゝですかアやりますよウ」

私の女房が、これ又、トンチンカンではオクレをとらないタチの女で、バカらしいことは、忽ち相好をくずして、一役買ってしまうのである。イソイソと紙入れをひらいて、五百円の束をつくって、

「あらア、もういゝの。えーと、コレダ」

「アラ、まだヨツ。キヤーツ。ワーツ。まだ、まだ、キヤーツ」

二人の女は忽ち目の色が変わっているが、さすがに先生方は札束をおだしにならない。女

房はフと気がついて、ノボセ気味にイソイソとお札を数えて束にして、

「ハイ、凹井さん、ハイ、般若さん、ハイ、ハイ、弁吉さん」

損をするのは、私ばかりじゃないか。弁吉は札束を握ると、膝をのりだして、

「ようし。ボクが、もうけてやるよねえ。ハハハア」

「インチキはいけないよ」

お魚女史は凄いい睨みを弁吉にくれて、それから、とたんにニツコリと、片手にニツ、片手に一つ、ピースの箱をとりあげた。

「コレ、ワカル。ヨク、ワカルネ。ヒトツ、アナ、アルヨ。ヨク、ミル。ワカルネ」

ヒラヒラと手先を廻し、テーブルへ置き並べ、置きかえる。

「オカネ、ダス。アナ、アル、アタルネ。オカネ、アゲル。コレ、アナ、アル。アナ、ナイネ」

一同、同じ一つへ、はった。女史がその箱をひっくりかえす。アナがない。女史はサツサと札束をつかんで、帯の間にはさんだ。

「ふうむ」

弁吉が、怪しそうに残る二ツの箱をにらんでいたが、手をのばして、一ツずつ、ひっく

りかえした。私も怪しいと思つたのである。然し、一ツ、アナのある箱がタシカにあつた。お魚女史は軽蔑しきつて、弁吉の手を押しつけて、箱をつかみあげて、サツサとそれもフトコロへ入れてしまった。

女史はテーブルを取り去つた。それから、フロシキ包みをといて、リンゴをつきさした竹の棒と、まるい紙をとりだしてきた。デンスケである。組立てができると、碁盤をひきだしてきて、腰を下して、

「デンスケですよ。いゝですか。奥様、今度は、シツカリねエ。廻しますよウ」

クルクル廻りだす。女史はサツと身構えて、紅潮し大口をあいたと思うと、

「張つた、張つたア、さア、張つたア。張つて悪いはオヤジの頭ア。張らなきや食えないチョーチン屋ア」

とんでもない大声をはりあげる。外は嵐だから、いゝようなものゝ、はずかしくて、とても聞いていられない。私はねむくなつたので、先にひきあげて、ねむってしまった。

私の家にはフトンが二人ぶんしかないのである。夏なら何人でもお泊めできるが、春さきの嵐の日では、一人だけしか泊れない。御三方の帰る電車は、もう、なくなつていた。そのころは、節電のため、終電が早やかつたのである。

お魚女史は我が意を得たりと御三方を防空壕へ案内し、夜の明けるまで、デンスケと三つのピースの箱をやった。御三方は、スツテンテンにやられたのである。困ったことには、女房の奴まで喜び勇んで、ついて行って、私の紙入れをカラにしてきた。

その日以来、凹井狭介先生が足繁く私を訪問するようになった。理由は申すまでもなくお判りであろう。

弁吉がアゴをなで、

「アハハハ。四十の恋も、案外、つつましいもんだねエ。ハハハア」
など、ニヤリニヤリしているが、その本人も、同じ程度の心境であろう。

成行の程は判らないが、どうせバカゲタ結末にきまっている。

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 07」筑摩書房

1998（平成10）年8月20日初版第1刷発行

底本の親本：「八雲 第三巻第八号」八雲書店

1948（昭和23）年8月1日発行

初出：「八雲 第三巻第八号」八雲書店

1948（昭和23）年8月1日発行

入力：tatsuki

校正：砂場清隆

2008年5月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お魚女史

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>